

保育園での3年間のあゆみ

社会福祉法人 ひまわり会 井戸保育園
濱本 律子
須川 めぐみ

園紹介

- ・社会福祉法人ひまわり会 井戸保育園
- ・三重県南部の熊野市にある私立保育園
- ・定員数 80名（園児数 55名）
- ・保育理念：子ども一人ひとりを大切にし、保護者から信頼され、子育てを共に行い、地域に愛される保育園を目指す。

園児紹介

- ・Sくん 6歳
- ・気管切開
- ・人工呼吸器使用
- ・胃瘻造設
- ・難治性てんかん
- ・体温調整不良
- ・1年の在宅保育を経て令和4年4月～井戸保育園 入園
- ・生活の中心はベッド、移動時はバギー使用

入園後

- ・家庭での生活、園での日課に沿って、デイリープログラムを作成。
- ・初めての通園、体温調整不良により低体温を起こしやすい為、環境調整に努める。
- ・小さな子ども達の中での突発的な事故防止の為、常に看護師と保育士の2人体制で周囲の危険防止に努める。
- ・体調に気を配りながら、行事・クラス活動に積極的に参加し、子ども達から多くの刺激を得られるようにする。
- ・クラスだけでなく、異年齢児との関わりを大切にする。

デイリープログラム

時間	保育内容	医療的ケアの内容
8:40	登園	★登園時チェック 呼吸器、加湿器、酸素
	検温	・バイタルサイン・ 換気量チェック
		・持参物品の確認
9:00	おむつ交換	・尿量チェック
	水分注入	お茶150ml
	リハビリ・ マッサージ	
9:40	朝の会	・らいおん組の部屋へ
	活動	・クラス活動や製作など
11:00	検温	・バイタルサイン 換気量チェック
	おむつ交換	・尿量チェック
11:15	給食	給食150ml+お茶10ml

時間	保育内容	医療的ケアの内容
12:00	検温	・バイタルサイン・ 換気量チェック
	(リハビリ・マッサージ)	
12:30	点眼・軟膏	
13:00	おむつ交換	・尿量チェック
	水分注入	お茶100ml
13:20	体位変換	
14:30	おむつ交換	・尿量チェック
	おやつ・水分注入	おやつ50ml+ お茶50ml
15:30	降園	保護者への報告・ 持参物品の返却

ぱんだ組(3歳児クラス)での様子

どの程度までの活動が可能なのか、どの程度で低体温がみられるのか、どのようにすれば低体温を防ぐことができるのかを試行錯誤しながらの1年だった。コロナ禍ということもあり、自室での活動が多かった。クラスの友達が部屋に来てくれて交流していた。

暖かい日には散歩に出掛けることができ、凧揚げをしたり桜を見に行ったりすることができた。

給食・おやつの味見も、好きな物にはとてもよく口を動かし反応してくれる。

徐脈と尿路感染の為、秋に10日程の入院があったが、体調は落ち着いていた。

きりん組(4歳児クラス)での様子

朝の会や製作などクラスの部屋で行うことが増えた。

座位保持椅子に移動し、友達と同じテーブルで過ごせるようにした。

クラスにいる時間に覚醒していることが多く、目をパチパチする姿がよく見られた。

春にはこいのぼりを見に出掛け、夏には色水遊びをし、秋には芋掘り、冬にはマフラー作りにも挑戦することができた。

活動範囲が拡大し、体温管理が難しいと感じることも多くあったが、その度、方法を考え対応していった。

体調面では、発作は時々みられるが、強く・大きな発作や呼吸・循環に影響を及ぼすような発作はなく落ち着いていた。

らいおん組(5歳児クラス)での様子

前年同様、朝の会や製作などクラスの部屋で行う。これまでとの大きな違いは、Sくんのできないことを友達が助けてくれる。製作の準備や片付け、朝の会の当番の紹介などをこれまでは側にいる大人がしていたことを子ども達がしてくれる。

いつの間にか「Sくんといえば緑」とイメージカラーもでき、色を選ぶ時には緑色を持ってきてくれるようになる。

茶道教室や英語教室に参加し、抹茶を味見すると口をすぼめて動かしている。

保育参観ではお母さんと一緒に製作をしたり、暑い夏には、友達が足に水をかけてくれたりした。運動会や発表会の練習にもみんなと一緒に参加した。Sくんの手の上げ下げを友達がいたわりながらしてくれた。

体調は落ち着いており、発作は時々みられるが頓服を使用することもなく過ごせた。

Sくんとの関わりの中で

栄養士・調理師

医学的ケア児と関わるのは初めてで、特別なことと捉えていたが、他の子ども達と同じように給食を注入している姿、綿棒で味見をすると、美味しそうに嬉しそうな表情をしているのを見て、園児の一人として安全で美味しい給食を提供しようと思った。



保護者の協力を得て、サンプルを持ってきてもらい、自宅と同様な物が提供できるよう調理してくれている。

保育士

特別な存在として見ていた。できないことの方が多という思いを持っていた。しかし、一緒に過ごしていく中で、表情の変化や体の動き等、色々なことを知ることができた。Sくんがクラスの子ども達と関わることで色々な刺激をもらい成長していること、他児と変わりなく一人の子どもとして過ごしていることを知った。

他児の声を聞いたりすると、目をパチパチさせたり穏やかな表情を見せてくれたり、行事と一緒に参加する姿を見て、みんなと同じように同じ経験をして楽しさを感じられることの大切さを感じた。

どうすれば自然に関わりを持てるか、何が一緒にできるか、みんなで楽しめるか等、考えるようになった。

医療的ケア児が身近になった。

色々な気づきができることを嬉しく思い、学ぶことが多かった。できる限り、クラスの一員として他の子ども達と同じような環境で過ごせるようにし、クラスの一員として声掛けをし、頑張りを認めるようにした。

Sくんとの関わりによる子ども達の変化

初めは少し緊張している様子の子どももいたが、一緒に活動を行っていくにつれて、自然と側に行く姿が見られるようになった。

保育者が手を握りに行ったり、近くで声掛けをすることで、スムーズに親しみをもって関われるようになった。

受診・レスパイトで休みの日には、Sくんは？と聞いてくれるようになった。

クラスの子ども達は、Sくんの表情を見ることも覚え、「目をパチパチしてたね」「笑って嬉しそう」など、Sくんの反応に喜ぶ姿も見られるようになってきた。

活動の後には「Sくんまたねー」と自然に声掛けしている。

運動会や発表会の大きな行事では、一緒に何かをやり遂げることも感じているように思う。

Sくんとの関わりで思いやりなど、色々な成長ができている。

最後に

保育園に入園したことで、多くの人に出会い、たくさんの刺激をもらい3年間のあゆみの中で成長する姿が見られた。職員・他の園児にも変化が見られた。

発表会のらいおん組で発表した「私と小鳥と鈴と」の手話のように医療的ケア児だから「できない」ではなく「色々なことができるんだよ」「みんな違って みんないいんだよ」という多様性を教えられたように思う。